

伝統的橋詰のデザイン規範

— 江戸後期の図会類を分析資料にして —

東京大学 農学部 正会員 堀 繁
東京大学 工学部 正会員 篠原 修
日本工営株式会社 溝口 伸一

A Study on a Traditional Design Principle of City Facilities in Bridge Foot Spaces

by Shigeru Hori
Osamu Shinohara
Shin-ichi Mizoguchi

概 要

本研究は、デザイン様式が確立し、各種の型が生きていた江戸時代後期の橋詰のデザインの背後に、それを律する如何なる規範があったのかを明らかにすることを目的としたものである。

橋詰の特性を規定する要因として、橋の格（道の格、中心からの遠近、要所性で決まる）、繁華性（橋の袂の賑わいで決まる）、場所柄（都市や河道、土地利用の性格で決まる）の3つを設定し、当時の図会から収集した江戸50橋、大坂23橋、京10橋、計83橋の橋梁についてそれらを調べた。次に、橋詰の高札、見世、植栽、連絡施設の有無、デザイン、形状を調べ、続いて以上の特性規定要因と各施設・装置との関係を分析した。その結果、

①高札にはヒエラルキーを有する4タイプの形状があり、それは橋の格に規定されていた。

②見世には仮設構造のものと常設構造のものがあり、それは橋の格と繁華性の2つに規定されていた。

③植栽は橋詰内には殆ど無く、特に市街掘割の橋詰には皆無だった。すなわち、植栽は橋台の構造に規定され、それを破壊しかねない樹木は受け入れられなかったと考えられる。橋台の構造は特に河道特性を反映するから、結局植栽は場所柄に規定されていたといえてよい。また、従来伝統的植栽手法といわれてきた橋畔植栽は一例のみで、多くは橋詰に面する建物の添えとしてあった。

④連絡施設は江戸で少なく、大坂では多かった。また、都市内の商業地とそうでない場所とでは、前者は幅員が広いのに対し、後者は狭く、商業という社会的場所柄の影響を受けているようだった。

このように都市のコンテクストを形成する特定の要因が橋詰の施設、装置の立地と形状を規定し、その結果当時の橋詰は一定の秩序に従いつつ、多種多様でありえたことがわかった。（江戸後期、橋詰、都市コンテクスト）

1. 研究の目的

高度経済成長期の社会全体が経済性・機能性を優先した結果、都市も無機的になりすぎた。その反省から近年自然の復権を都市に求める声が強く聞かれる。具体的にはアメニティやエコロジーを水や緑に求めようとするものであり、様々な事業や施策が既に取られ始めている。

水辺に関するものとしては、親水公園や親水護岸が挙げられる。さらに川と陸の結節点に位置する橋詰も、都市民を水辺に誘う装置として改めて注目を集め、その再整備が行われており、マニュアル類も多く出ている¹⁾。

だが実際には、①つつじなど都市公園と変わらない植栽、②水辺という立地と無関係なファニチャー類などつまらないだけでなく、必然性に疑問を感じさせるものが依然として多い。しかもデザインがみな似かよひ、各橋の個性も窺えない。これは設計に問題があるのはもちろんだが、その前に踏まえるべき計画や設計の規範が欠如していることに、より重大でより根本の問題があると考えられる。

そこで本研究は、デザイン様式が確立し、各種の型が生きていた江戸時代後期の橋詰を取り上げ、そのデザインの裏に如何なる規範があったのかを明らかにすることを目的としたものである。

江戸時代を対象とするのは、その時代が文明的には西欧より遅れていたにせよ、文化的には成熟していたといわれ、文化としてのデザインの洗練が十分なされていたと思われることによる。

2. 研究の方法

分析の対象としたのは江戸、大坂、京の街なか及びその近郊に架かるものである。理由は、資料が収集しやすいこと、デザインの洗練度が高かったと思われることの2点である。資料は当時出版された

表-1 分析対象とした江戸の橋梁とその特性の一覧

No	橋梁名	道の格	中心性	要所性	橋の格	繁華性	場所柄	河川の種類
1	筋違橋	街道	近	○	A	○		街中掘割
2	日本橋	街道	近	○	A	○	商業地	街中掘割
3	中の橋	表通り	近		C	○	商業地	街中掘割
4	道浄橋	表通り	近		C	○	商業地	街中掘割
5	両国橋	街道	近		B	○	遊興地	自然大川
6	江戸橋	表通り	近		C	○	商業地	街中掘割
7	淀橋	表通り	遠		D			自然小川
8	名不詳1	表通り	遠		D		寺社町	郊外掘割
9	藍染橋	裏通り	近		D			街中掘割
10	弁慶橋	表通り	近		C	○	遊興地	街中掘割
11	昇橋	裏通り	遠		D			郊外掘割
12	豊岸橋	表通り	近		C	○	商業地	街中掘割
13	稲荷橋	表通り	近		C		寺社町	街中掘割
14	今戸橋	表通り	近		C		寺社町	郊外掘割
15	瀬戸橋	裏通り	遠		D		遊興地	自然大川
16	新橋	街道	近		B	○		街中掘割
17	汐留橋	表通り	近		C	○		街中掘割
18	組橋	表通り	近		C			街中掘割
19	名不詳2	街道	近		C	○	旅籠町	自然小川
20	弾正橋	表通り	近		C			街中掘割
21	白魚橋	表通り	近		C			街中掘割
22	真福寺橋	表通り	近		C			街中掘割
23	木挽橋	表通り	近		C	○	遊興地	街中掘割
24	大川橋	街道	近		B	○	遊興地	自然大川
25	鼠橋	表通り	近		C	○		街中掘割
26	湊橋	表通り	近		C	○		街中掘割
27	名不詳3	裏通り	近		D			自然小川
28	蓬萊橋	裏通り	遠		D			街中掘割
29	鶴見橋	街道	遠		C			自然小川
30	常盤橋	表通り	近	○	B	○		街中掘割
31	一石橋	表通り	近		C	○		街中掘割
32	帷子橋	表通り	遠		D	○	旅籠町	自然小川
33	今川橋	街道	近		B	○	商業地	街中掘割
34	千住大橋	街道	遠	○	B			自然大川
35	中の橋	街道	遠	○	B	○	旅籠町	自然小川
36	呉服橋	表通り	近	○	B	○		街中掘割
37	赤羽橋	街道	遠	○	B			自然小川
38	柳橋	裏通り	近		D	○	遊興地	街中掘割
39	親父橋	表通り	近		C	○	遊興地	街中掘割
40	永代橋	表通り	近		C	○	遊興地	自然大川
41	天神橋	表通り	遠		D		寺社町	掘割
42	一の橋	表通り	遠		D		寺社町	掘割
43	万年橋	裏通り	遠		D		寺社町	掘割
44	藪小路橋	裏通り	近		D			街中掘割
45	相模殿橋	表通り	遠		D		寺社町	自然小川
46	柳島橋	表通り	遠		D		寺社町	掘割
47	太鼓橋	表通り	遠		D		寺社遊興	自然小川
48	石橋	裏通り	遠		D			自然小川
49	名不詳4	裏通り	遠		D		寺社遊興	掘割
50	名不詳5	裏通り	遠		D		寺社遊興	掘割

図会類²⁾であり、そこから拾い上げた橋梁は表-1、2、3の江戸50橋、大坂23橋³⁾、京10橋、計83橋である。図-1に江戸町中の対象橋梁を示した。

絵の観察からデザイン的に面白く、かつ重要な施設として高札、見世、植栽、連絡施設を取り上げ、分析対象とした。その他には番屋、役床、柵、橋のディテール（袖高欄や親柱など）などがあり、また橋詰に接する民家のデザインも興味を引くものがあったが本稿では直接の対象としていない。

各施設について、デザインのタイプ分類をおこない、それらデザイン・タイプを規定する要因を仮説として提出した。最後に仮説の検証を収集した橋詰の事例を整理することでおこなった。

本稿では、①デザイン・タイプを規定する要因の説明、②各施設のデザイン・タイプと要因との関係、それらからいえる③伝統的橋詰のデザイン規範の順で論じていく。

表-2 分析対象とした大坂の橋梁とその特性の一覧

No	橋梁名	道の格	中心性	要所性	橋の格	繁華性	場所柄	河川の種類
1	日本橋	街道	近	○	A	○	はたご町	街中掘割
2	京橋	街道	近	○	A	○	市場多い	街中掘割
3	間屋橋	表通り	近		C	○	材木間屋街	街中掘割
4	長堤の橋	表通り	近	○	B	○	工業拠点	街中掘割
5	高麗橋	街道	近	○	A	○	商業地	街中掘割
6	新町橋	表通り	近		C	○	遊興地	街中掘割
7	永代橋	裏通り	近		D	○	卸し場	街中掘割
8	上の橋	裏通り	近		D	○	卸し場	街中掘割
9	昇平橋	裏通り	遠		D	○	行楽地	掘割
10	上ツナギ橋	表通り	近		C	○	商業地	街中掘割
11	下ツナギ橋	表通り	近		C	○	商業地	街中掘割
12	よしのや橋	表通り	近		C	○	商業地	街中掘割
13	炭屋橋	表通り	近		C	○	商業地	街中掘割
14	波橋	表通り	近		C	○	遊興地	街中掘割
15	太左エ門橋	表通り	近		C	○	遊興地	街中掘割
16	新中橋	表通り	近		C	○	遊興地	街中掘割
17	上之橋	表通り	近		C	○	魚市場	
18	下之橋	表通り	近		C	○	魚市場	
19	寺町橋	表通り	近		C		寺社町	
20	無名橋	表通り	近		C			
21	名不詳1	表通り	遠		D	○	行楽地	
22	名不詳2	表通り	遠		D			
23	名不詳3	表通り	遠		D			

表-3 分析対象とした京の橋梁とその特性の一覧

No	橋梁名	道の格	中心性	要所性	橋の格	繁華性	場所柄	河川の種類
1	十神寺橋	街道	遠		C		はたご町	自然小川
2	大和橋	裏通り	遠		D	○	遊興地	街中掘割
3	平治橋	街道	遠		C	○	はたご町	掘割
4	三条大橋	街道	近	○	A	○	はたご町	街中掘割
5	四条大橋	表通り	近	○	B	○	遊興地	街中掘割
6	五条大橋	街道	近	○	A	○	寺社遊興地	街中掘割
7	京橋	街道	近	○	A	○	遊興地	街中掘割
8	七条河原橋	表通り	近	○	B		寺社町	街中掘割
9	名不詳4	表通り	近	x	C	○	遊興地	街中掘割
10	名不詳5	表通り	近	x	C	○	遊興地	街中掘割

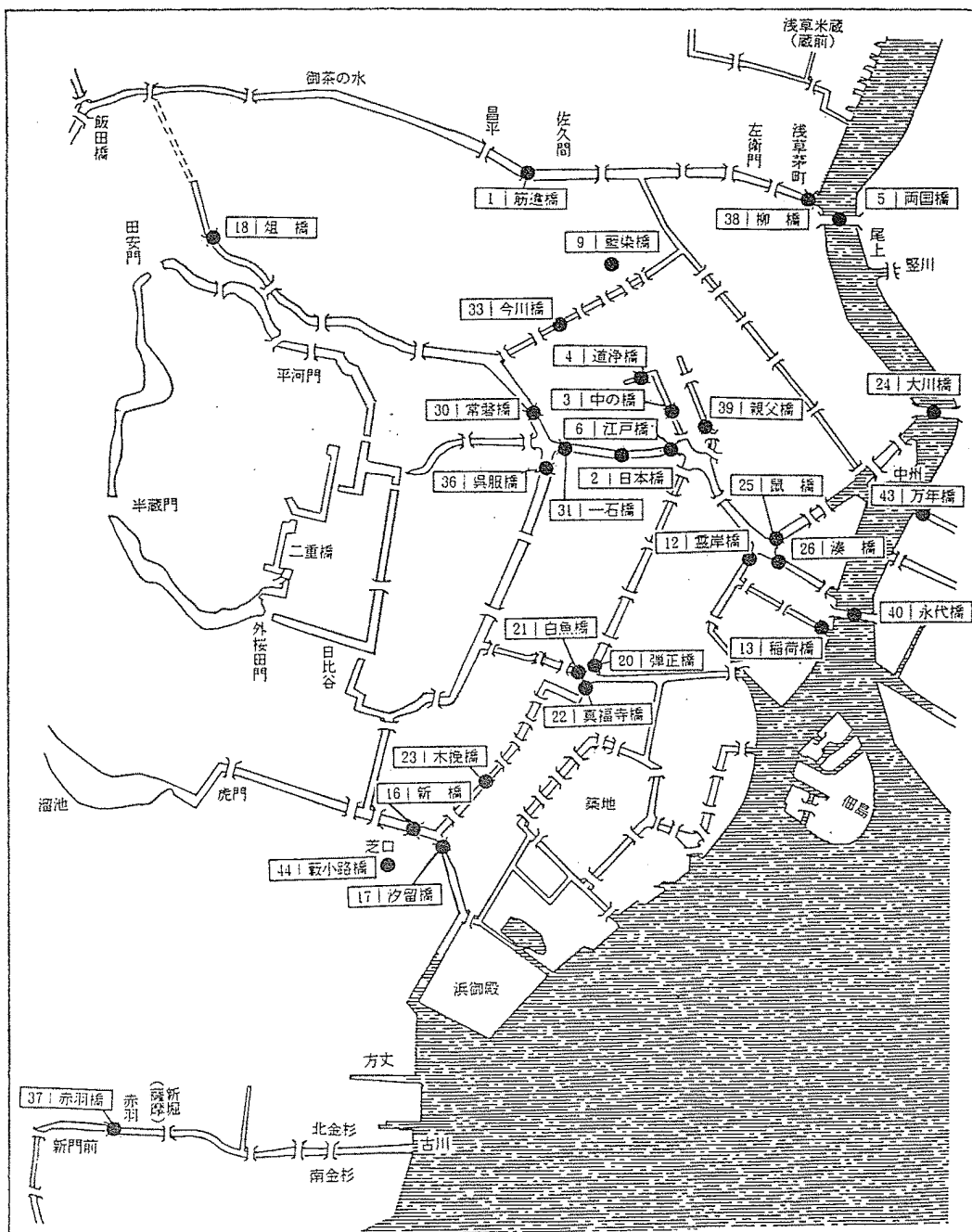


図-1 江戸街なかの分析対象橋梁の位置

(鈴木理生(1989):「江戸の川東京の川」、p.146、井上書院 掲載図から、河川・掘割・橋梁をトレースしたものをベースにしている)

なお、本稿掲載の絵は特に断わらないかぎり、江戸名所図会からの引用である。

3. 施設等のデザイン・タイプを規定する要因

(1) 橋の格

後述するが、橋詰にはデザイン・ヒエラルキー⁴⁾が存在していた。主として公的施設に認められ、それは橋の公的重要性に起因すると考えられる。「大阪城代が直接管理する12の公儀橋とそれ以外の町橋」⁵⁾という橋の重要性による区分がデザインにも影響を与えているという見方である。だが、公儀橋と町橋という区分だけでは、デザイン・ヒエラルキーは十分説明出来ない。そこで「橋の格」という概念を設定した。管理者と利用者が意識的にはもちろん、無意識的にも各橋の格付けを承知していて、格に見合ったデザインがなされたとするものである。

橋の格の規定要因として、①道の格(街道、表通り、裏通りの違いによる)、②遠近(江戸城など中心からの)、③要所(見附や御門、町の出入口など)の三つをあげ、それらの組み合わせで格を決め(表-4)、各橋を格付けした(表-1、2、3)。

(2) 繁華性

物売りや大道芸人が出るなど、橋の袂の賑わいは橋詰の空間に影響を及ぼす。その賑わいを「繁華性」と名付け、集客地(商業地や遊興地)との近接性と図会にみられる賑わいによって、大・中・小の3段階で評価した。

(3) 場所柄

商業地の橋と遊興地のそれとではデザインが異な

るが、これは土地利用に基づく地域の社会的性格の差を反映しているのである。また、それがどのような河川であるのかという河道特性も影響を与えるが、前者を社会的場所柄、後者を自然的場所柄、併せて「場所柄」と名付け、名所図会等の資料から判断した。

4. 橋詰の各種施設の形状とその規定要因

(1) 高札

橋詰には高札場が設けられ、そこには「幕府から民衆への広報である高札が掲げられ」⁶⁾ていた。その高札の形状を整理したところ、表-5の4タイプに分類できた。各タイプの事例を図-2、3、4、5に示す。この4タイプには明らかにデザインのヒエラルキーが認められる。

このような階層性は橋の格を反映していると推測できるのでその関係を整理した(表-6)。高札は公的施設であり、繁華性や場所柄によって勝手にデザインが変わるとは考えられないため、細部デザインについては分析していない。

高札Aは格A橋に5つ(格Bに1つ)、高札Bは格B橋に1つ(格Cに2、格Dに1)、高札Cは格C橋に3つ(格Bに1)、高札Dは格D橋に2つ(他にはない)あ

表-4 道の格、中心性と要所性による橋詰の格の決定

道の格	中心性 要所性	近	い	遠	い
	要所	要所		要所	
街 道		格A	格B	格B	格C
表 通 り		格B	格C		格D
裏 通 り			格D		格D

表-5 高札のタイプ分類

	A	B	C	D
高札の デザイン タイプ				
デザイン の特 徴	屋根・土台が つく	屋根と土台はつく が、土台はない	土台のみがつけら れる	高札のみで、他 の付属物はない

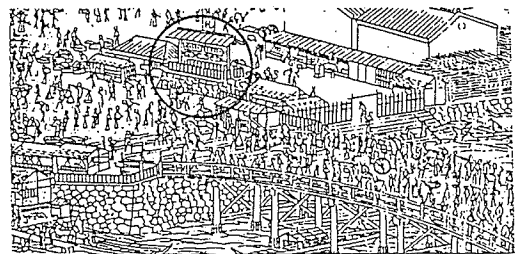


図-2 高札Aタイプ（柵、屋根、石垣つき）の事例（日本橋：江戸）

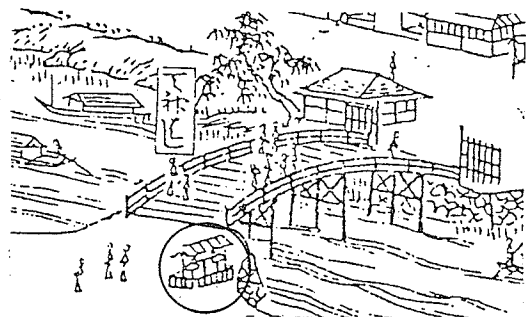


図-3 高札Bタイプ（柵、屋根つき）の事例（天神橋：江戸）

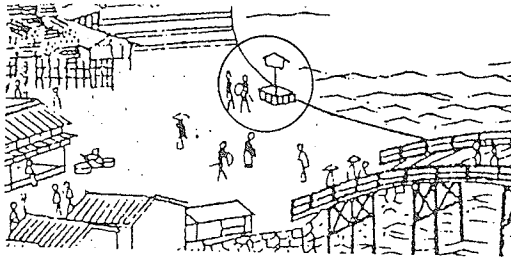
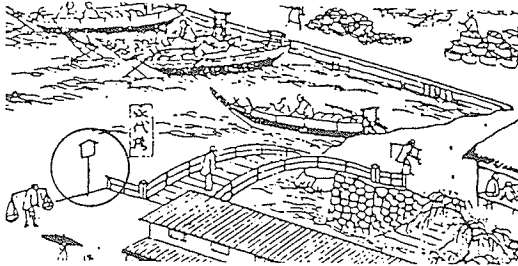


図-4 高札Cタイプ(柵つき)の事例(稲荷橋:江戸)

図-5 高札Dタイプ(高札のみ)の事例(永代橋:大坂)
(摂津名所図会)

り、明らかに相関が読み取れる。

高札は重要なものであるから、「その管理にはずいぶん神経が使われた」⁷⁾ ようだが、維持管理だけ

でなくデザイン管理もしっかりとなされていたことがわかる。

(2) 見世

橋詰によく出された見世を、①仮設性の強い構造のもの(図-6)、②常設性の強い構造のもの(図-7)の2つに大別した。ただし、郊外に多い茶屋はこれら見世とは異質ゆえ対象から外している。

人の通らぬ所に見世が出るはずもなく、繁華性が大きく効いているのは間違いないが、それだけでは仮設・永久の差は説明できない。そこには格の影響があると考え、両者を分析軸として全83橋を整理し(表-7)、集計した(表-8)。建物が橋詰内なのか、橋詰外で橋詰に面するののかの特定は難しい



図-6 仮設構造の見世の事例(両国橋:江戸)

表-6 各橋梁の高札のタイプと橋の格との関係一覧

橋の格	A			B			C			D			格不明	
	都市	京	大坂	江戸	京	大坂	江戸	京	大坂	江戸	京	大坂		江戸
高札の	A	三条大橋 京橋	日本橋 高麗橋	日本橋			中の橋							
	B						新橋			彈正橋 天神橋			右橋	大坂 1橋
	C				宇治橋					江戸橋 稲荷橋 今戸橋				
	D										大和橋	永代橋		
タイプ	橋詰に高札なし	五条橋	京橋	筋違橋	七条河原橋	長堀の橋	両国橋 大川橋 常盤橋 今川橋 千住大橋 奥服橋 赤羽橋	四條大橋 十津寺橋	問屋橋 新町橋 上ツナギ橋 下ツナギ橋 炭屋橋 戎橋 太左エ門橋 新中橋 上之橋 寺町橋 下之橋 無名橋	中の橋 道浄橋 弁慶橋 寛岸橋 汐留橋 俎橋 白魚橋 真福寺橋 木挽橋 鼠橋 湊橋 一石橋 鶴見橋 親父橋 永代橋		上の橋 昇平橋	淀橋 藍染橋 弁橋 瀬戸橋 蓬萊橋 帷子橋 柳一の橋 万年橋 敷小路橋 相模殿橋 柳島橋 太鼓橋	京2橋 大坂2橋 江戸5橋

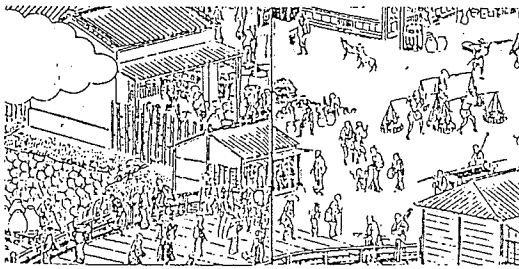


図-7 常設構造の見世の事例（今川橋：江戸）

が、周辺状況から判断した。

見世のある橋架数は繁华性強では27橋（見世なし11橋）に対し、繁华性低では3橋（なし32橋）と賑わいのない橋詰には見世がないことがわかる。

全見世数に対する仮設の割合は格Aが3/4、格Bが5/7、格Cが8/18であり、格の高い橋には仮設が多く、低い橋には常設が多い。また、繁华性が高いにも拘らず、格Aでは半数（4/8）に見世がないが、ないのは筋違橋（江戸）、高麗橋（大坂）（図-8）、三条大橋（京）、京橋（京）と、いずれも格Aの中でも特に格の高い橋である。つまり橋の格が上がると見世は仮設になり、さらに上がると見世自体が見られなくなるの

表-8 橋の格と繁华性による見世タイプ別データ集計表

タイプ別 見世数		繁 華 性	
		強	弱
橋 の 格	A	仮設 4 常設 1 なし 4	データなし
		仮設 4 常設 2 なし 1	仮設 0 橋 常設 0 なし 3
		仮設 6 常設 10 なし 6	仮設 2 常設 0 なし 10
	D	データなし	仮設 1 常設 0 なし 19
格不明		見世なし	10 橋

である。橋詰に商売物を置くことを禁じる教令があるが、たびたび出された⁸⁾ところをみると、見世は恒常的に出され、それらは放置すればすかさず常設化されたと思われる。だが、格の高い所ほど規制が強く、常設化できなかったのではなかろうか。朝鮮使節参着時の教令に「橋詰の店を取り壊せ、見苦しいものは置くな」⁹⁾というものがあるが、外国使節や将軍家などが通る格の高い橋詰ではさすがに常設

表-7 各橋架の見世のタイプと橋の格との関係一覧

	橋の格 A	橋の格 B		橋の格 C		橋の格 D	格不明
	繁华性あり	繁华性なし	繁华性あり	繁华性なし	繁华性あり	繁华性なし	
橋詰に 見世なし	筋違橋（江戸） 高麗橋（大坂） 京 橋（京） 三条大橋（京） 計 4 橋	赤羽橋（江戸） 千住大橋（江戸） 七条河原橋（京） 計 3 橋	常盤橋（江戸） 計 1 橋	十津寺橋（京都） 寺町橋（大坂） 無名橋（大坂） 弾正橋（江戸） 真福寺橋（江戸） 鶴見橋（江戸） 計 6 橋	間屋橋（大坂） 上ツナギ橋（大坂） 下ツナギ橋（大坂） よしのや橋（大坂） 炭屋橋（大坂） 下之橋（大坂） 四条大橋（京都） 太左エ門橋（大坂） 弁慶橋（江戸） 宇治橋（京都） 計 10 橋	上之橋（大坂） 永代橋（大坂） 昇平橋（大坂） 達楽橋（江戸） 右 橋（江戸） 万年橋（江戸） 今戸橋（江戸） 帷子橋（江戸） 天神橋（江戸） 一の橋（江戸） 数小路橋（江戸） 淀 橋（江戸） 柳島橋（江戸） 藍染橋（江戸） 柳 橋（江戸） 芥 橋（江戸） 瀬戸橋（江戸） 太鼓橋（江戸） 大和橋（京都） 計 19 橋	江 戸 5 橋 大 坂 3 橋 京 2 橋
露 天					上之橋（大坂）1 橋		
板屋根 よしず	日本橋（江戸） 京 橋（大坂） 五条橋（京） 計 3 橋		両国橋（江戸） 呉服橋（江戸） 大川橋（江戸） 新 橋（江戸） 長堀の橋（大坂） 計 5 橋	俎 橋（江戸） 白魚橋（江戸） 計 2 橋	中の橋（江戸） 江戸橋（江戸） 稲荷橋（江戸） 永代橋（江戸） 戎 橋（大坂） 計 5 橋	相模殿橋（江戸） 計 1 橋	
瓦屋根	日本橋（大坂） 計 1 橋		中の橋（江戸） 今川橋（江戸） 計 2 橋		道浄橋（江戸） 豊岸橋（江戸） 一石橋（江戸） 鼠 橋（江戸） 親父橋（江戸） 淡 橋（江戸） 木挽橋（江戸） 汐留橋（江戸） 新町橋（大坂） 新中橋（大坂） 計 10 橋		

（註）「格Aの繁华性なし」、及び「格Dの繁华性あり」は事例がなかった。

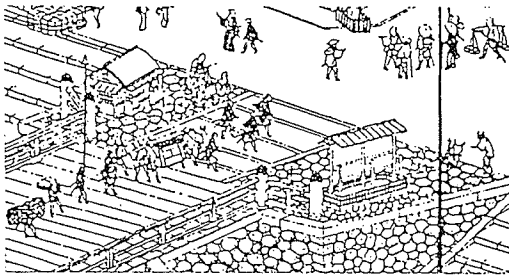


図-8 格が高く見世が出せない事例（高麗橋：大坂）
（摂津名所図会）

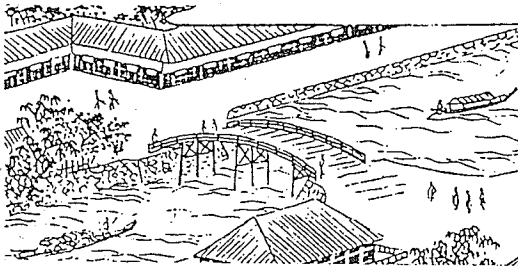


図-9 繁華性が低く見世が出ない事例（万年橋：江戸）

化出来ず、より格の高い橋詰では出ることさえ不可能だったと思われる。

従って見世が見られない橋詰には、①繁華性が低く見世が「出ない」もの（図-9）、②繁華性は高いが、格が高すぎて、見世が「出られない」もの（図-8）の2種類があったといえよう。

以上の格と繁華性に規定される見世のタイプと立地を纏めたものが表-9である。

表-9 見世のタイプと橋の格及び繁華性との相関模式

見世の タイプ	繁 華 性	
	強	弱
橋 の 格	A 出られない	出 な い
	B 仮設が主体	
	C 常設が主体	
	D —	

(3) 植栽

橋詰の重要な装置の一つである植栽が、どこにあるかを整理した（表-10）。なお、樹木が植栽されたものか、自然に生えたものが残ったものかを特定するのは難しいが、後者にも残した意志が働いていると考え、植栽と同列に扱い分けしていない。

橋詰につながる道にある（図-10）のが3例、橋

表-10 植栽位置別橋梁一覧

都市 植栽位置	江 戸	大 坂	京	
橋詰内にあるもの	相模殿橋 不詳 1 帷子橋 計 3		宇治橋 計 1	
橋詰に面するいは建物の敷地内にあるもの	筋違橋 千住大橋 中の橋 道浄橋 永代橋 一石橋 白魚橋 真福寺橋 弾正橋 太鼓橋 右 橋 柳島橋 敷小路橋 一の橋 天神橋 計 23	稲荷橋 弁 橋 瀬戸橋 不詳 2 不詳 3 不詳 4 不詳 5 淀 橋 計 3	無名橋 不詳 1 京 橋 三条大橋 十津寺橋 計 2	
橋詰につながる道にある	鶴見橋 俎 橋 計 2	昇平橋 計 1		
植栽が橋詰とその周辺にないもの	日本橋 大川橋 常盤橋 今川橋 呉服橋 阿国橋 江戸橋 弁慶橋 今戸橋 豊築橋 柳 橋 新 橋 計 22	汐留橋 笠岸橋 木挽橋 湊 橋 親父橋 風 橋 万年橋 蓬萊橋 赤羽橋 中の橋 計 22	高麗橋 長堀の橋 新町橋 間屋橋 よしのや橋 下ツナギ橋 上ツナギ橋 炭屋橋 戎 橋 新中橋 太左エ門橋 上之橋 計 19	京 橋 五条橋 七条河原橋 四条大橋 大和橋 不詳 4 不詳 5 計 7
総 計	50 橋	23 橋	10 橋	

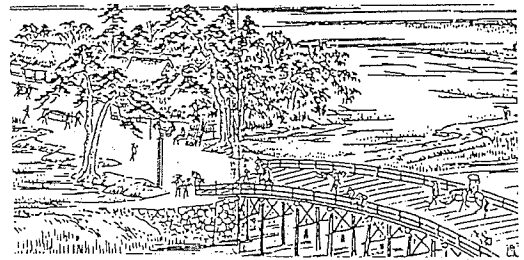


図-10 植栽が橋詰につながる道にある事例（鶴見橋：江戸）

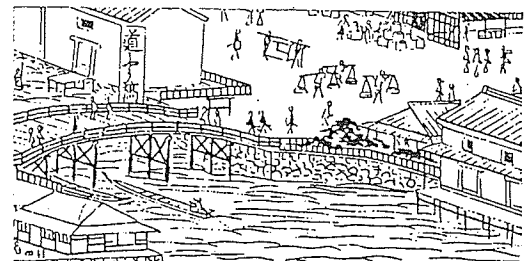


図-11 植栽が橋詰に面する建物の添えとしてある事例（道浄橋：江戸）

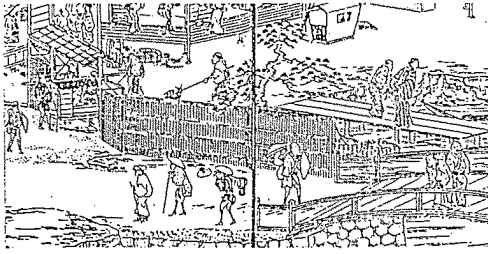


図-1 2 植栽が橋詰に面する建物の敷地内にある事例
(瀬戸橋:江戸)

詰に面する建物の添えとして(図-1 1)あるいは建物敷地内にある(図-1 2)のが28例あった。だが、肝心の橋詰内にあるのは4例とわずかで、特に市街掘割の橋詰にはなかった。考えてみれば、土と石が材料の橋台への植栽は橋自体を危うくするものであり、そこから十分離して植えるのが自然である。つまり、橋詰内の植栽の有無は橋台の構造によって

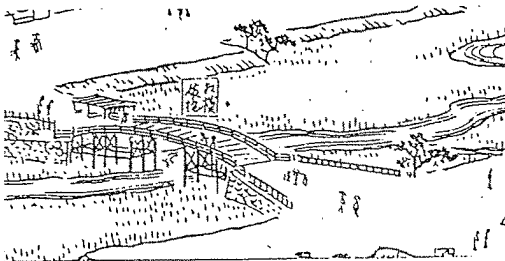


図-1 3 植栽が橋詰内にある事例1(相模殿橋:江戸)

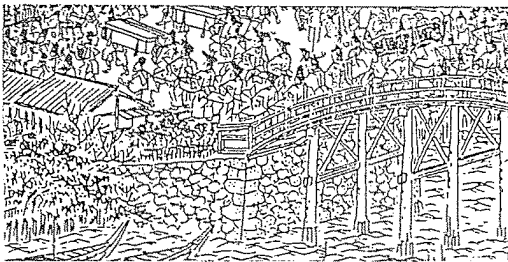


図-1 4 植栽が橋詰内にある事例2(名不詳1橋:江戸)

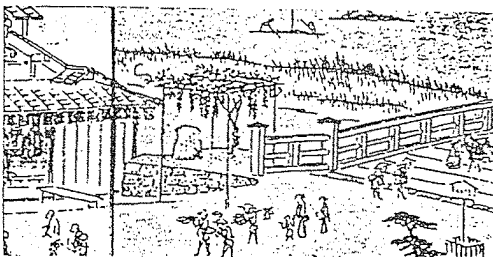


図-1 5 植栽が橋詰内にある事例3(宇治橋:京)
(都名所図会)

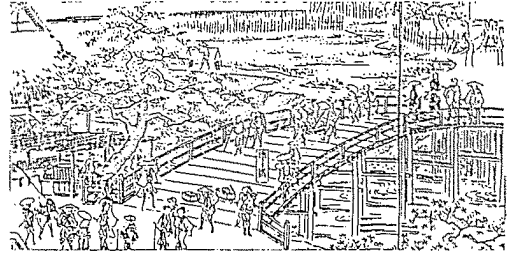


図-1 6 植栽が橋詰内にある事例4(帷子橋:江戸)

規定されるのである。橋台の構造はさらに橋梁の立地場所でほとんど決まり、それは河道特性を反映しているのであるから、結局のところ植栽は大きく把握すれば自然立地的場所柄に規定されているといつてよい。

橋詰内の4例も土手との境(図-1 3)、灌木(図-1 4)、藤棚(図-1 5)であって、従来伝統的植栽手法といわれてきた高木の橋畔植栽(橋の袂にあるもの)は帷子橋のわずか1例(図-1 6)であった。この橋は自然河川(帷子川)に架かり、樹木が橋台を破壊する心配はなく、橋畔植栽はこのような場合しかありえなかったろう。なお、この木は茶屋の添え、

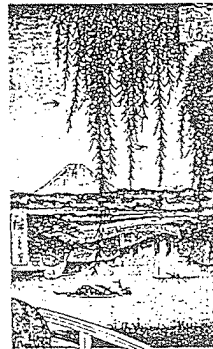


図-1 7 「ハッ見の橋」
(安藤広重:名所江戸百景)
ハッ見の橋は一石橋の別名。
この図は柳の橋畔植栽の例としてよく引用される。

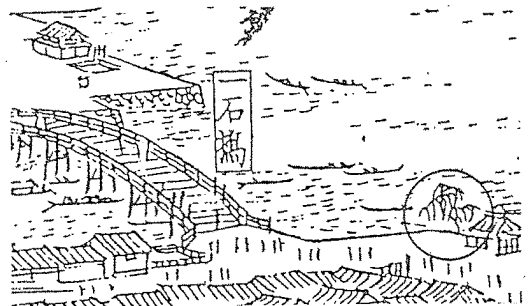


図-1 8 一石橋の例(1)
○内が柳と思われる樹木。番屋の添えとしてある。
橋から離れており、他に樹木は見当たらない。

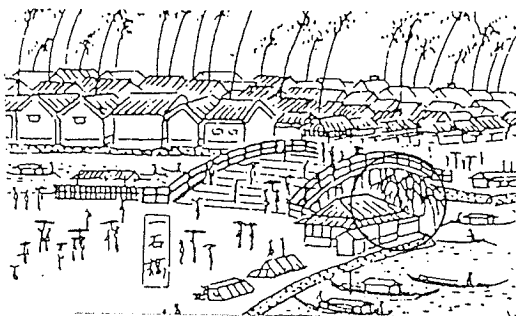


図-19 一石橋の例(2)

図-17と別の図による一石橋。やはり樹木は橋から離れている。

挨拶の装置としての役割が強く感じられ、純粹の橋の袂木とも言い切れない。

橋畔植栽の例としてよく引用される広重の「八ツ見の橋」(図-17)の柳は、図会では橋詰から離れている(図-18、19)。この橋は掘割に架かるゆえ、橋詰には入れなかったと考えられる。他の広重の絵からの推測だが、構図上の必要性から柳の位置を動かしたものと思われる。

(4) 連絡施設

川と道を結ぶ階段などの連絡施設も橋詰にとって重要な施設だが、都市間で比較した結果、江戸は少なく(6/26)、大坂に多かった(11/15)。

仮説だが、大消費地江戸では荷を舟から直接蔵に入れるため荷運用の連絡施設が少なく、一方流通商業地大坂は蔵も使うが短期的な橋詰周辺の利用も多く連絡施設が多いのではないかと、すなわち商業地かどうかという場所柄を反映していると考え、各都市毎に商業地とそうでない場所との比較を試みた。また、荷運の機能性は幅員の広狭に最も影響されようから、連絡施設を幅員で分けた。集計したものが表-11である。なお、連絡施設を設けなくても川へ下りられる橋詰もかなりあり、それらは対象から除外した。

その結果、連絡施設のある橋詰の割合は、江戸が商業地3/17、それ以外3/9と商業地が少ないのに対し、大坂では4/5対7/10(京は商業地のデータなし)と、商業地が多かった。また、幅員の広い連絡施設の割合は、商業地が6/7、その他が3/13であり、商業地に広いものが多かった。以上のことから、連絡施設は社会的場所柄を反映していると推測されるが、裏付けを取っておらず、仮説の域を出ていない。

表-11 連絡施設数の集計

	連絡施設有無	連絡施設あり		連絡施設なし
		幅員	広い	狭い
江戸	商業地	3	橋	0
	それ以外	1	2	6
大坂	商業地	3	1	1
	それ以外	1	6	3
京	商業地	—	—	—
	それ以外	1	2	6

5. 伝統的橋詰のデザイン規範

以上、橋詰のデザインを規定する要因として提示した橋の格、繁華性、場所柄が具体的にどのように橋詰諸施設の有無とデザインを規定しているかを明らかにした。結果をまとめると次のとおりである。

- ①高札のデザインにはヒエラルキーを有する4タイプがあり、それは橋の格に規定されていた。
- ②見世には仮設と永久構造のものとがあり、それは橋の格と繁華性の2つに規定されていた。
- ③ 植栽の有無は橋台の構造に規定され、それはさらに立地的場所柄に規定されていた。
- ④ 連絡施設の有無と幅員は都市や地域の社会的場所柄に規定されていた(仮説)。

表-12に整理した。

表-12 橋詰諸施設と都市のコンテクスト要素との関係

		都市のコンテクスト要素		
		橋の格	繁華性	場所柄
高	札	○		
見	世	○	○	
植	栽			○
連絡施設				(○)

橋の格、繁華性、場所柄とは、それぞれ独立した都市の空間特性であり、都市のコンテクスト(文脈)を形成する要素に他ならない。

すなわち、江戸後期の橋詰には都市のコンテクストを踏まえるというデザイン規範が存在していたと考えられ、橋詰諸施設はそれに基づいて具体的な形を取っていたのである。それゆえ、デザインに必然性があり無理がないのである。しかも都市のコンテクストを形成する要素が複数で、それぞれが独立的に特定のもののデザインを規定する結果、当時の橋詰は都市全体で一定の秩序に従いつつ、多種多様で

ありえたのである。

都市のコンテクストを踏まえるという規範は最近また都市施設のデザインに使われ始めているが、ここまでうまく使いこなすレベルに戻ってはいない。

橋詰のデザインは言うまでもなく橋詰の機能と不可分である。江戸期と現代とでは橋詰の機能、利用のされかたが異なり、橋詰に持ち込まれる装置や施設の種類、重要度が異なっている。それゆえ江戸期のデザイン自体が直接現代に援用できるとは思わない。だが本稿で明らかにした、デザインの大筋を規定する規範といった考え方は十分参考になると考えられる。

補注及び引用参考文献

1) 例えば次のようなものがある。

①土木学会構造工学委員会橋の景観とその形態及び色彩に関する研究小委員会(1982):「美しい橋のデザインマニュアル」、pp.56～57、(社)土木学会

②土木学会(1985):「街路の景観設計」、pp.102～105、技報堂出版

③(財)道路環境研究所道路景観研究会(1988):「道路景観整備マニュアル(案)」、pp.85～87、大成出版社

④(社)土木学会(1988):「水辺の景観設計」、pp.109～110、技報堂出版

2) 図会は以下のとおり。本研究は日本名所風俗図会全18巻:角川書店(1980～1981)を参照した。

東都歳事記	天保9(1938)年
絵本江戸土産	嘉永3(1850)年
江戸名所図会	天保7(1836)年
摂津名所図会	寛政8(1796)年
浪速の脈わい	寛政10(1798)年
拾遺名所図会	天明7(1787)年
都名所図会	安永9(1780)年

3) 大坂の橋全般については下記を参考にしている。

松村博(1987):「大阪の橋」、pp.452、松頼社

4) 伊東孝(1986):「東京の橋」p.154、鹿島出版会
震災復興橋梁に皇居を頂点として橋の構造様式によるデザインとコストのヒエラルキーがあることを指摘し、その規定要因に皇居からの距離をあげている。

5) 吉田巖(1985):「橋のはなしⅡ」、p.133、技報堂

6) 松村博(1988):「橋梁景観の演出」、p.104、鹿島出版会

7) 前掲書 5)、p.136

8) 内務省警保局(1927):「徳川時代警察沿革誌」(上下)、pp.1202,874、内務省警保局 によると、例えば、慶安元年7月12日、明暦4年正20日、寛文元年9月17日、同年11月15日、同11年6月27日など。

9) 前掲書 8)下巻、p.505

「朝鮮人當御地え参着候時分(中略)橋詰門際などにのみ店有之所は早々崩取可申候勿論見苦敷物差置申間敷候」